

| | | |
|---|--------|--------------|
| 聖書神学専攻・旧約聖書神学関係 | | |
| 旧約聖書神学特殊研究 b | 小友 聡 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件> | |
| <授業のテーマ> 死海文書の「感謝の詩編」(ホダヨート)を、原典を参照しながら読む。 | | |
| <到達目標> 死海文書の神学と思想を理解し、全体像を展望できるようにする。 | | |
| <授業の概要> 死海文書翻訳委員会訳『死海文書Ⅷ』を用いて、「感謝の詩編」を講読する。 | | |
| <履修条件> 死海文書に関心があり、神学的に思考できる人。 | | |
| <授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 死海文書とは 第3回 「感謝の詩編」概説 第4回 I～IV (テキスト1-9頁) 第5回 V～VI (テキスト～20頁) 第6回 VII～VIII (テキスト～30頁) 第7回 IX～X (テキスト～45頁) 第8回 XI～XII (テキスト～60頁) 第9回 XIII～XIV (テキスト～74頁) 第10回 XV～XVI (テキスト～88頁) 第11回 XVII～XIX (テキスト～100頁) 第12回 XX～XXI (テキスト～112頁) 第13回 XXII～XXIV (テキスト～122頁) 第14回 XXV～XXVI (テキスト～130頁) 第15回 まとめ | | |
| <準備学習等の指示> あらかじめテキストの原典と翻訳を読み、その思想内容をよく考える。 | | |
| <テキスト> 死海文書翻訳委員会訳『死海文書Ⅷ詩編』、ぷねうま舎、3,600円を購入すること。原典はこちらで用意する。 | | |
| <参考書・参考資料等> その都度指示するが、ゲザ・ヴェルメシ(守屋訳)『解き明かされた死海文書』(青土社)を読んでおくこと。 | | |
| <学生に対する評価(方法・基準)> 授業での発表のほか、学期末に死海文書に関するレポート(8,000字)提出で評価する。 | | |

| | | |
|---|--------|--------------|
| 聖書神学専攻・旧約聖書神学関係 | | |
| 旧約聖書文学特殊研究 a | 小友 聡 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件> | |
| <授業のテーマ> K. シュミット『旧約聖書文学史入門』（山我訳）を講読し、内容をきちんと理解する。 | | |
| <到達目標> 現代ドイツ旧約学の最新の傾向と知見を知ると同時に、批判的な視点も持つ。 | | |
| <授業の概要> テキストをじっくり読み、その内容を理解した上で、全員で議論する。 | | |
| <履修条件> 最新の旧約学の知見を得たい人、聖書学的な思考がきちんとできる人。 | | |
| <授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 A. 「旧約聖書文学史の課題、歴史、諸問題」第1章 第3回 同第2-3章 第4回 B. 「アッシリア到来以前」 第5回 C. 「アッシリア時代の文学」第1章～第3章第2節 第6回 同第3章3-4節 第7回 D. 「バビロニア時代の文学」第1章～第3章2節 第8回 同第3章第3-4節 第9回 E. 「ペルシア時代の文学」第1章～第3章第2節 第10回 同第3章3-4節 第11回 F. 「プトレマイオス朝時代の文学」第1章～第3章1節 第12回 同第3章2-3節 第13回 G. 「セレウコス朝時代の文学」 第14回 H. 「正典化と正典形成」 第15回 まとめ | | |
| <準備学習等の指示> あらかじめテキストを読み、内容を理解する。また、必要な文献も併せて読む。 | | |
| <テキスト> K. シュミット（山我訳）『旧約聖書文学史入門』、教文館、4,500円を用いる。 | | |
| <参考書・参考資料等> K.Schmid, Theologie des Alten Testaments, 2019. そのほか、授業において、その都度指示する。 | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）> 担当者を決めて、毎回レポートしていただく。その発表内容と学期末のレポート（8,000字）で評価する。 | | |

| | | |
|---|--------|--------------|
| 聖書神学専攻・旧約聖書神学関係 | | |
| 旧約聖書文学特殊研究 b | 小友 聡 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件> | |
| <授業のテーマ> 故大住雄一先生の旧約学諸論文を読み、その神学的遺産をきちんと学ぶ。 | | |
| <到達目標> 大住雄一先生が旧約学者として何を考え、何を目指したかを知り、大住旧約学の全容を理解する。 | | |
| <授業の概要> 毎回、大住雄一先生の旧約論文の一つをじっくり読み、全員で議論する。 | | |
| <履修条件> 大住先生の旧約学を学び、また、それをきちんと理解できる人。 | | |
| <授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 「旧約法研究の展開と諸問題」(『神学』52、1990年) 第3回 「預言者アモスの召命」(『神学』54、1992年) 第4回 「汝の神に向かって備えをせよ、イスラエルよ」(『神学』55、1993年) 第5回 「申命記の重心」(『聖書学論集』28、1995年) 第6回 「神の臨在の保証」(『神学』63、2001年) 第7回 「『詩篇研究』への補遺—アルファベットうたをめぐって」(『果てなき探究』、2002年) 第8回 「汝の父と母を敬え」(『テレビンの木陰で』、2002年) 第9回 「モーセ五書批判概観」(『総説 旧約聖書』、2007年) 第10回 「律法からキリストへ」(『神学』70、2008年) 第11回 「135番目の詩編はなぜ出エジプトの賛美か」(『聖書学論集』42、2010年) 第12回 「一つの十戒、複数のテキスト」(『古代世界におけるモーセ五書の伝承』、2011年) 第13回 「救済と創造」(『神学』73、2011年) 第14回 「民の選びの歴史」(『旧約聖書を学ぶ人のために』、2012年) 第15回 「種入れぬパンの祭り—農耕の祭りの歴史化という構想について」(『聖書学論集』46、2014年) | | |
| <準備学習等の指示> あらかじめ大住先生の論文を読み、聖書学的に評価する。 | | |
| <テキスト> 大住雄一先生が発表された学術的諸論文。 | | |
| <参考書・参考資料等> その都度指示するが、授業で取り上げなかった諸論文も読むこと。 | | |
| <学生に対する評価(方法・基準)> 授業への参加度と学期末のレポート(8,000字)で評価する。 | | |

| | | |
|--|--------|--------------|
| 聖書神学専攻・旧約聖書神学関係 | | |
| 旧約聖書原典特殊研究 a | 本間 敏雄 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件> | |
| <p><授業のテーマ> 創世記 16, 17 章、アブラハム物語中のハガル・イシュマエル物語とアブラハム契約（割礼）物語をヒブル語原典（マソラ本文）において釈義しつつ、写本とマソラの専門的知識を修得し、ユダヤ教正典（Miqra）としてのマソラ本文理解と諸現象の理解を深め、テキストの神学と本文形成の歴史を探る。</p> | | |
| <p><到達目標> レニングラード写本（Codex Leningradensis）を読み、写本本文の基礎的特質をマソラと共に理解できる。現代の代表的印刷聖書 BHS 及び B HQ 本文とマソラ情報の特徴を理解し、それぞれの脚注の内容判断と背景洞察、本文学的評価によりテキストに即した釈義ができる。その土台として、写本によりマソラ学者の仕事と本文の諸現象を認識し、その釈義的意義とテキストの神学、背後のユダヤ教神学について洞察できる。</p> | | |
| <p><授業の概要> 創世記 16, 17 章のハガル・イシュマエル物語とアブラハム契約（割礼）物語をヒブル語原典（レニングラード写本 L）において読み、写本本文の特質と個々のマソラの意味を釈義的に学ぶ。また写本の歴史と全体像を学び、マソラ本文の諸現象を分析。当該諸テキストの「生活の座」（Sitz im Leben）と「テキストの神学」理解を試みつつテキストに表出しているユダヤ教神学（マソラ本文神学）について考察する。イシュマエル/イサク物語は長い歴史を経て現代のイスラエル/アラブ問題、「神の民」とは何者か、その選びに通底する重要な問題であり、また「神の民」のしるしとされる「割礼」とは何か。学びと討議を通して思索を深めたい。「旧約聖書原典釈義 a」と合同。</p> | | |
| <p><履修条件> ヒブル語基礎文法修得者。</p> | | |
| <p><授業計画> 第 1 回 16 : 1 オリエンテーション、アブラハム、ハガル・イシュマエル物語 第 2 回 16 : 2, 3 サライの不妊 第 3 回 16 : 4 - 6 サライとハガルの確執 第 4 回 16 : 7 - 10 荒れ野の泉で 第 5 回 16 : 11 - 12 御使いの託宣 第 6 回 16 : 13 - 16 ベエル・ラハイ・ロイ、イシュマエル命名 第 7 回 五書研究史（資料説等）とアブラハム物語 第 8 回 17 : 1 - 3 エル・シャダイ顕現 第 9 回 17 : 4 - 8 契約：アブラハム改名、子孫・土地 第 10 回 17 : 9 - 14 契約のしるし：割礼 第 11 回 17 : 15 - 16 サラ改名 第 12 回 17 : 17 - 19 アブラハムの笑い、イサク誕生契約予告 第 13 回 17 : 20 - 22 約束：イシュマエルとイサク 第 14 回 17 : 23 - 27 割礼実施 第 15 回 総括（聖書学的、神学的）</p> | | |
| <p><準備学習等の指示> 当該本文を BHS で読み、構文と小マソラ（Mp）を調査し、その内容を考察。なお当該本文に関する問題、事柄で「ヒブル語入門」12 補説や「旧約聖書の本文研究」（下記）を読んでおくと、諸現象を写本と本文形成の歴史において理解し、マソラ本文のユダヤ教神学的背景を考察する視座が養われる。</p> | | |
| <p><テキスト> レニングラード写本（Codex Leningradensis）写真版、Biblia Hebraica Stuttgartensia（BHS）：Genseisis、Biblia Hebraica Quinta（BHQ）：Genesis、「ヒブル語入門」（改訂増補版 左近/本間）（10 文の構造（構文論）、12 補説：本文の諸現象（補注一覧））。</p> | | |
| <p><参考書・参考資料等> 「ヘブライ語聖書への手引き」（R.ウオンネベルガー 松田伊作訳）、A simplified guide to BHS（H.P.Rueger）。「旧約聖書の本文研究」（E.ヴェルトヴァイン 鍋谷/本間共訳）。G.E.Weil, Massorah Gedolah-iuxta Codicem Leningradensem B19a, 1971, C.D.Ginsburg, Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible, 1897/1966. A.Geiger, Urschrift und Uebersetzungen der Bibel in ihrer Abhaengigkeit von der innern Entwicklung des Judentums, 1857, 2Auf.1928. P.Kahle, The Cairo Geniza, 2ed., 1959. なおヒブル語本文と諸翻訳の関連の実例については「翻訳と本文」（1）～（34）（『形成』273～315 号所収。1993.9/10 - 1997.3）。他諸文献、資料は順次提示</p> | | |
| <p><学生に対する評価（方法・基準）> 課題発表、討議、レポート（本文 6000 字以上）の総合で評価する。</p> | | |

| | | |
|--|--------|--------------|
| 聖書神学専攻・旧約聖書神学関係 | | |
| 旧約聖書原典特殊研究 b | 本間 敏雄 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件> | |
| <p><授業のテーマ> 創世記 18, 19 章、アブラハム物語中のイサク誕生予告、ソドム・ロト物語をヒブル語原典（マソラ本文）において積義しつつ、本文形成の歴史と諸現象、テキストの神学とそのユダヤ教的背景を探る。</p> | | |
| <p><到達目標> レニングラード写本（Codex Leningradensis）を読み、写本本文の基礎的特質をマソラと共に理解できる。現代の代表的印刷聖書 BHS 及び BHQ 本文とマソラ情報の特質を理解し、それぞれの脚注の内容判断と背景洞察、本文学的評価によりテキストに即した積義ができる。その土台として、写本によりマソラ学者の仕事と本文の諸現象を認識し、その積義的意義とテキストの神学、背後のユダヤ教神学について洞察できる。</p> | | |
| <p><授業の概要> 創世記 18, 19 章のイサク誕生予告とソドム・ロト物語をヒブル語原典（レニングラード写本 L）において読み、写本本文の特質とマソラを概説（写本（マソラ本文）の諸現象と積義との関係性等）。ヒブル語本文の語分析と構文分析、本文批判、文献批判、形態史、伝承史等の積義的諸方法を検討しつつ積義し、当該諸テキストの「生活の座」（Sitz im Leben）と「テキストの神学」理解を試みる。現代の印刷聖書本文と脚注の特質を学び、諸欧文、諸邦訳との関係と問題性も把握したい。イシュマエル/イサク物語は長い歴史を経て現代のイスラエル/アラブ問題、「神の民」とは何者かに通底し、特にそのしるしとされる「割礼」とは何かは重要な問題であり、学びと討議を通して思索を深めたい。「旧約聖書原典積義 b」と合同。</p> | | |
| <p><履修条件> ヒブル語基礎文法修得者。</p> | | |
| <p><授業計画> 第1回 18：1－3 3人の旅人 第2回 18：4－8 アブラハムの接待 第3回 18：9－12 旅人の約束とサラの笑い 第4回 18：13－15 主の約束とサラの恐れ 第5回 18：16－21 ソドムとゴモラ：裁きの計画 第6回 18：22－26 アブラハムの執り成し：赦しと正義 第7回 18：27－33 執り成し（2）：赦しと問い 第8回 マソラ本文形成の歴史：マソラ本文の諸現象と背景 第9回 19：1－3 2人の御使い、ロトの接待 第10回 19：4－9 ソドムの男たち 第11回 19：10－14 ロトの娘婿たち 第12回 19：15－22 ロトの妻と娘たち：ツォアル 第13回 19：23－29 ソドムとゴモラの滅亡 第14回 19：30－38 ロトの娘たちと子孫：モアブとアンモン 第15回 総括（聖書学的、神学的）</p> | | |
| <p><準備学習等の指示> 当該本文を BHS で読み、構文と小マソラ（Mp）を調査し、その内容を把握を考察。なお当該本文に関連する問題、事柄で「ヒブル語入門」12補説や「旧約聖書の本文研究」（下記）を読んでおくと、諸現象を写本と本文形成の歴史において理解し、マソラ本文のユダヤ教神学的背景を考察する視座が養われる。</p> | | |
| <p><テキスト> レニングラード写本（Codex Leningradensis）写真版、Biblia Hebraica Stuttgartensia（BHS）：Genseisis、Biblia Hebraica Quinta（BHQ）：Genesis。 「ヒブル語入門」（改訂増補版 左近/本間）（10文の構造（構文論）、12補説：本文の諸現象（補注一覧））。</p> | | |
| <p><参考書・参考資料等> 「ヘブライ語聖書への手引き」（R.ウオンネベルガー 松田伊作訳）、A simplified guide to BHS（H.P.Rueger）。「旧約聖書の本文研究」（E.ヴェルトヴァイン 鍋谷/本間共訳）。G.E.Weil, Massorah Gedolah-iuxta Codicem Leningradensem B19a, 1971, C.D.Ginsburg, Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible, 1897/1966. A.Geiger, Urschrift und Uebersetzungen der Bibel in ihrer Abhaengigkeit von der innern Entwicklung des Judentums, 1857, 2Auf.1928. P.Kahle, The Cairo Geniza, 2ed.,1959. なおヒブル語本文と諸翻訳の関連の実例については「翻訳と本文」（1）～（34）（『形成』273～315号所収。1993.9/10－1997.3）。他諸文献、資料は順次提示</p> | | |
| <p><学生に対する評価（方法・基準）> 課題発表、討議、レポート（本文 6000 字以上）の総合で評価する。</p> | | |

| | | |
|---|----------------------|--------------|
| 聖書神学専攻・旧約聖書神学関係 | | |
| 聖書語学特殊研究 a | 佐藤 泉 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件>通年で履修するのが望ましい。 | |
| <授業のテーマ>聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行なう。 | | |
| <到達目標>①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、ペシッタを読むことができるようになる。③聖書の原典とペシッタや他の古代訳との比較を行なうことができるようになる。 | | |
| <授業の概要>練習問題に取り組むながら、ペシッタを読むために必要なシリア語文法を学ぶ。聖書の原典と古代訳との比較に慣れていく。 | | |
| <履修条件>ヒブル語履修済みであること。 | | |
| <授業計画> 第1回：序 シリア語を学ぶ意義等を話し、子音について（1）ヤコブ派の書体を学ぶ。 第2回：子音について（2）ネストリウス派とエストラングラの書体を学ぶ。 第3回：母音について ヤコブ派とネストリウス派の母音記号を学ぶ。 第4回：代名詞について 人称・指示・疑問・関係代名詞を学ぶ。 第5回：前置詞について 基本的なものをいくつか学ぶ。 第6回：名詞について（1） 基本的な名詞について、ヘブライ語との比較をしつつ、その特徴を学ぶ。 第7回：代名詞語尾について ヘブライ語と同様にシリア語も名詞等に代名詞語尾がつくことを学ぶ。 第8回：名詞について（2） 母音の移動を伴うものを学ぶ。 第9回：名詞について（3） 不規則変化するものを学ぶ。 第10回：規則動詞について（1） Peal 形の変化、特に完了を学ぶ。 第11回：規則動詞について（2） Peal 形の変化、特に未完了・命令・分詞・不定詞を学ぶ。 第12回：規則動詞について（3） Ethpeel 形の変化を学ぶ。 第13回：規則動詞について（4） Pael 形と Ethpael 形の変化を学ぶ。 第14回：規則動詞について（5） Aphel 形と Ettaphal 形の変化を学ぶ。 第15回：規則動詞について（6） 代名詞語尾のついた形の変化を学ぶ。 | | |
| <準備学習等の指示>授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。ヒブル語の文法も参照しておくこと。 | | |
| <テキスト>Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949. | | |
| <参考書・参考資料等> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926. Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1987. Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001. | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、ペシッタのテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。 | | |

| | | |
|--|----------------------|--------------|
| 聖書神学専攻・旧約聖書神学関係 | | |
| 聖書語学特殊研究 b | 佐藤 泉 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件>通年で履修するのが望ましい。 | |
| <授業のテーマ>聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行なう。 | | |
| <到達目標>①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、ペシッタを読むことができるようになる。③聖書の原典とペシッタや他の古代訳との比較を行なうことができるようになる。 | | |
| <授業の概要>シリア語文法の学びを継続する。その後には講読に入るが、まず新約からマタイによる福音書の「山上の説教」、さらに旧約からエレミヤ書等をペシッタで読み、さらに聖書の原典や他の古代訳との比較を行なう。（箇所は未定。授業中に指示する。） | | |
| <履修条件>ヒブル語履修済みであること並びに聖書語学特殊研究 a（シリア語）履修済みであること。 | | |
| <授業計画> 第1回：不規則動詞について（1） Pè Nûn 動詞の変化を学ぶ。 第2回：不規則動詞について（2） Lamed 喉音動詞の変化を学ぶ。 第3回：不規則動詞について（3） Pè 'alep 動詞の変化を学ぶ。 第4回：不規則動詞について（4） Pè Yôd 動詞の変化を学ぶ。 第5回：不規則動詞について（5） 二根字動詞の変化を学ぶ。 第6回：不規則動詞について（6） 二重'ayin 動詞の変化を学ぶ。 第7回：不規則動詞について（7） Lamed 'alep・Lamed Yôd 動詞の変化を学ぶ。 第8回：「山上の説教」の講読（1） Jennings の辞書を引きながら、ペシッタを読むことに慣れる。 第9回：「山上の説教」の講読（2） 原典との比較をしつつ読むことを味わう。 第10回：「山上の説教」の講読（3） シリア語文法、特に不規則変化する名詞を確認しつつ読む。 第11回：「山上の説教」の講読（4） シリア語文法、特に動詞の変化を確認しつつ読む。 第12回：「山上の説教」の講読（5） シリア語が解釈に影響を与えている一例について話す。 第13回：エレミヤ書等の講読（1） ネストリウス派の書体・母音記号で読むことに慣れる。 第14回：エレミヤ書等の講読（2） シリア語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：エレミヤ書等の講読（3） 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。 | | |
| <準備学習等の指示>授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。ヒブル語の文法も参照しておくこと。ペシッタの講読に関しては、原典にも目を通しておくこと。 | | |
| <テキスト>Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949. | | |
| <参考書・参考資料等> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926. ; Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden : O. Harrassowitz, 1987. ; Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001. ; J. Payne Smith, A compendious Syriac dictionary : founded upon the Thesaurus Syriacus of R. Payne Smith, Winona Lake, Ind. : Eisenbrauns, 1998. ; 左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011 ; William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971 ; Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1960 ; Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen : E. Pfeiffer, 1938 ; Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950 | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、ペシッタのテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。 | | |

| | | |
|---|--------|--------------|
| 聖書神学専攻・新約聖書神学関係 | | |
| 新約聖書神学特殊研究 a | 焼山 満里子 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件> | |
| <p><授業のテーマ> 新約聖書神学から特に黙示思想研究を取り上げ新約神学理解を深める。</p> | | |
| <p><到達目標> 旧約聖書からイエスまでの終末論の系譜をたどり、終末思想の起源と発展を理解する。</p> | | |
| <p><授業の概要> 新約聖書釈義、研究書講読を通してパウロ神学を学ぶ。</p> | | |
| <p><履修条件> なし</p> | | |
| <p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 門脇佳吉『パウロの中心思想』 第3回 『終末論の系譜』第一部 1章 預言者の終末論 第4回 『終末論の系譜』第一部 2章 バビロン捕囚以後の地上的・政治的終末待望 第5回 『終末論の系譜』第一部 3章 「天上の神殿」の表象と神秘主義 第6回 『終末論の系譜』第一部 4章 宇宙史の終末論 第7回 『終末論の系譜』第一部 5章 イエス時代の政治主義的メシア運動 第8回 『終末論の系譜』第二部 6章 「神の国は近づいた」 第9回 『終末論の系譜』第二部 7章 「人の子」イエスの再臨 第10回 『終末論の系譜』第二部 8章 過去の中に到来している未来 第11回 テサロニケー1章釈義 第12回 テサロニケー2章釈義 第13回 テサロニケー3章釈義 第14回 テサロニケー4章釈義 第15回 テサロニケー5章釈義</p> | | |
| <p><準備学習等の指示> G・フィー『新約聖書の釈義』で紹介されている方法で、各回に指定されている課題図書、聖書箇所を十分に読んでから授業に臨むこと。</p> | | |
| <p><テキスト> 大貫隆『終末論の系譜』筑摩書房、2019年</p> | | |
| <p><参考書・参考資料等> 聖書外の文献については、『聖書外典偽典』教文館のシリーズ、死海文書、ナグハマディ文書を参照すること。</p> | | |
| <p><学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の授業参加、発表、期末レポート。博士課程後期の学生は毎回学生同士の発表を聞き、講評を述べる。</p> | | |

| | | |
|---|--------|--------------|
| 聖書神学専攻・新約聖書神学関係 | | |
| 新約聖書神学特殊研究 b | 焼山 満里子 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件> | |
| <授業のテーマ> 新約思想の中でもパウロ神学、黙示思想研究。 | | |
| <到達目標> 黙示思想、終末論について旧約聖書からイエスを経てパウロ神学に至るまでを理解する。 | | |
| <授業の概要> パウロ書簡の釈義、研究書講読を通してパウロ神学を学ぶ。 | | |
| <履修条件> なし | | |
| <授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 テサロニケの信徒への手紙二 1章釈義 第3回 テサロニケの信徒への手紙二 2章釈義 第4回 テサロニケの信徒への手紙二 3章釈義 第5回 『古代都市のキリスト教』1章 第6回 『古代都市のキリスト教』2章 第7回 『古代都市のキリスト教』3章 第8回 『古代都市のキリスト教』4章 第9回 『古代都市のキリスト教』5章 第10回 『キリスト教とローマ帝国』1章 第11回 『キリスト教とローマ帝国』2章 第12回 『キリスト教とローマ帝国』3章 第13回 『キリスト教とローマ帝国』4章 第14回 『キリスト教とローマ帝国』5章 第15回 まとめ レポート | | |
| <準備学習等の指示> G・フィー『新約聖書の釈義』で紹介されている方法で、各回に指定されている課題図書、聖書箇所を十分に読んでから授業に臨むこと。 | | |
| <テキスト>ミークス『古代都市のキリスト教』ヨルダン社、1989年 スターク『キリスト教とローマ帝国』新教出版社、2014年 | | |
| <参考書・参考資料等> 聖書外の文献については、『聖書外典偽典』教文館のシリーズ、死海文書、ナグハマディ文書を参照すること。 | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の授業参加、発表、期末レポート。博士後期の学生は4回目後釈義レポートを提出し、毎回の発表を聞いて講評する。 | | |

| | | |
|--|---|--------------|
| 聖書神学専攻・新約聖書神学関係 | | |
| 新約聖書原典特殊研究 a | 遠藤 勝信 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件>原則として通年(a,b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。 | |
| <p><授業のテーマ></p> <p>ヨハネによる福音書 16:07~17:23 までの原典積義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。</p> | | |
| <p><到達目標></p> <p>学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書積義の方法を修得する。</p> | | |
| <p><授業の概要></p> <p>はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向(研究史、方法論)を概観し、積義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。積義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。</p> | | |
| <p><履修条件></p> <p>新約ギリシア語原典テキスト読解力を有すること。ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい。</p> | | |
| <p><授業計画></p> <p>I. 講義を中心に</p> <p>第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と積義の諸問題を学ぶ。</p> <p>第02回 ギリシア語新約聖書本文批評の実際。</p> <p>第03回 テキストの文学批評の実際。</p> <p>第04回 テキストと歴史批評の実際。</p> <p>II. 演習(参加者による積義の発表とディスカッション)を中心に</p> <p>第05回 ヨハネ16:07~11の原典積義</p> <p>第06回 ヨハネ16:12~18の原典積義</p> <p>第07回 ヨハネ16:19~22の原典積義</p> <p>第08回 ヨハネ16:23~28の原典積義</p> <p>第09回 ヨハネ16:29~33の原典積義</p> <p>第10回 ヨハネ17:01~05の原典積義</p> <p>第11回 ヨハネ17:06~08の原典積義</p> <p>第12回 ヨハネ17:09~12の原典積義</p> <p>第13回 ヨハネ17:13~19の原典積義</p> <p>第14回 ヨハネ17:20~23の原典積義</p> <p>III. 総括</p> <p>第15回 積義演習の総括的な反省と展望。</p> | | |
| <p><準備学習等の指示></p> <p>クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、積義的問題点を明確にしてクラスに出席すること。</p> | | |
| <p><テキスト></p> <p>Nestle-Aland (28th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i></p> | | |
| <p><参考書・参考資料等></p> <p>R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年</p> <p>R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年</p> <p>R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年</p> <p>C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i>, 2003.</p> | | |
| <p><学生に対する評価(方法・基準)></p> <p>授業における発表と期末試験(指定されたテキストについての積義ペーパー [8,000~10,000文字])。積義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。</p> | | |

| | | |
|---|--|--------------|
| 聖書神学専攻・新約聖書神学関係 | | |
| 新約聖書原典特殊研究 b | 遠藤 勝信 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件>原則として通年 (a, b) で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。 | |
| <p><授業のテーマ></p> <p>ヨハネの黙示録 02：08～05:10 までの原典積義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。</p> | | |
| <p><到達目標></p> <p>学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書積義の方法を修得する。</p> | | |
| <p><授業の概要></p> <p>はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、積義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。積義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。</p> | | |
| <p><履修条件></p> <p>新約ギリシア語原典テキスト読解力を有すること。ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい。</p> | | |
| <p><授業計画></p> <p>I. 講義を中心に</p> <p>第01回 イントロダクション。黙示録の文学ジャンル。</p> <p>第02回 黙示録を読む前に（その1）：黙示録の周辺、背景理解。</p> <p>第03回 黙示録を読む前に（その2）：構造と構成、神学、他。</p> <p>第04回 黙示録1章～2章7節までを概観し、積義の営みにおける課題と観点を確認する。</p> <p>II. 演習（参加者による発表とディスカッション）を中心に</p> <p>第05回 黙示録02：08～11の原典積義</p> <p>第06回 黙示録02：12～17の原典積義</p> <p>第07回 黙示録02：18～29の原典積義</p> <p>第08回 黙示録03：01～06の原典積義</p> <p>第09回 黙示録03：07～13の原典積義</p> <p>第10回 黙示録03：14～22の原典積義</p> <p>第11回 黙示録04：01～06aの原典積義</p> <p>第12回 黙示録04：06b～11の原典積義</p> <p>第13回 黙示録05：01～05の原典積義</p> <p>第14回 黙示録05：06～10の原典積義</p> <p>III. 総括</p> <p>第15回 積義演習の総括的な反省と展望。</p> | | |
| <p><準備学習等の指示></p> <p>クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、積義の問題点を明確にしてクラスに出席すること。</p> | | |
| <p><テキスト></p> <p>Nestle-Aland (28th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i></p> | | |
| <p><参考書・参考資料等></p> <p>佐竹明著『ヨハネの黙示録』（上・下巻）2009年</p> <p>R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年</p> <p>R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i>, 1993.</p> <p>G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999.</p> <p>D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997.</p> <p>S. Smalley, <i>The Revelation of John</i> (IVP), 2005. 他、クラスで随時紹介。</p> | | |
| <p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての積義ペーパー [8,000～10,000文字]）。積義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。</p> | | |

| | | |
|--|-------------|--------------|
| 聖書神学専攻・新約聖書神学関係 | | |
| 聖書解釈学特殊研究 a | 中野 実 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件> 特になし | |
| <p><授業のテーマ> ヘブライ書の原典を講読することを通して、ヘブライ書についての学問的理解を身につける。また、それを通して新約聖書神学の重要問題に関する深い理解を養い、自分なりの評価を下せるようになる。</p> | | |
| <p><到達目標> 新約聖書テキストを原典から読み、釈義する力を身につけるとともに、専門的注解書、論文とも取り組むことによって、聖書を学問的および主体的に解釈する力を身につけることができる。</p> | | |
| <p><授業の概要> 今年度は、ヘブライ書の原典講読および釈義に取り組む。序論的な事柄を学んだ後、各単元を分担しながら読み、釈義していく。その際、各単元に関する注解書の議論にもふれながら、理解を深めていく。</p> | | |
| <p><履修条件> 前期課程との並行（合同）授業であるため、後期課程の履修者は、専門的な注解書や論文に取り組むことによって、釈義の作業やクラスの議論において前期課程の学生たちをリードする役割が求められている。</p> | | |
| <p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 緒論① いつ、どこで、誰によって執筆されたのか？</p> <p>第3回 緒論② 誰に対して何のために書かれたのか？</p> <p>第4回 緒論③ ヘブライ書の文学的構成および修辭的構造について</p> <p>第5回 1章1-4節 原典講読 本文批評、試訳、文法的分析、キーワード分析</p> <p>第6回 1章1-4節 原典講読 文脈、構成、背景</p> <p>第7回 1章1-4節 節ごとの注解および解説</p> <p>第8回 1章5-14節 原典講読 本文批評、試訳、文法的分析、キーワード分析</p> <p>第9回 1章5-14節 原典講読 文脈、構成、背景</p> <p>第10回 1章5-14節 節ごとの注解および解説</p> <p>第11回 2章1-4節 原典講読 本文批評、文法的分析、キーワード分析、文脈、構成、背景</p> <p>第12回 2章1-4節 節ごとの注解および解説</p> <p>第13回 2章5-18節 原典講読 本文批評、試訳、文法的分析、キーワード分析</p> <p>第14回 2章5-18節 原典講読 文脈、構成、背景</p> <p>第15回 2章5-18節 節ごとの注解および解説</p> | | |
| <p><準備学習等の指示> クラスで読むことになっているギリシャ語原典をしっかりと読むことだけでなく、そのテキストに関する注解書の該当部分を読んでから出席すること。</p> | | |
| <p><テキスト> ギリシャ語新約聖書</p> | | |
| <p><参考書・参考資料等> ヘブライ書に関する専門的（ギリシャ語テキストを前提にした）注解書をクラスで指示する。</p> | | |
| <p><学生に対する評価（方法・基準）> クラスへの積極的参加（出席、分担発表、質問、コメントなど）を求める。参加、分担参加（40%）、および（6,000 - 8,000字の）期末レポート（60%）によって総合的に評価する。出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。</p> | | |

| | | |
|---|-------------|--------------|
| 聖書神学専攻・新約聖書神学関係 | | |
| 聖書解釈学特殊研究 b | 中野 実 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件> 特になし | |
| <p><授業のテーマ> ヘブライ書の原典を講読することを通して、ヘブライ書についての学問的理解を身につける。また、それを通して、新約聖書神学の重要問題への深い理解を養い、自分なりの評価、批判を下せるようになる。</p> | | |
| <p><到達目標> 新約聖書テキストを原典から読み、積義する力を身につけるとともに、専門的注解書、論文とも取り組むことによって、聖書を学問的および主体的に解釈する力を身につけることができる。</p> | | |
| <p><授業の概要> 今年度は、ヘブライ書の原典講読および積義に取り組む。序論的な事柄を学んだ後、各単元を分担しながら読み、積義していく。その際、各単元に関する注解書の解釈にもふれながら、理解を深めていく。</p> | | |
| <p><履修条件> 前期課程との並行（合同）授業であるため、後期課程の履修者は、専門的な注解書や論文に事前にふれておくことによって、積義の作業やクラスの議論において前期課程の学生たちをリードする役割が求められている。</p> | | |
| <p><授業計画></p> <p>第1回 3章1-6節 原典講読 本文批評、試訳、文法的分析、キーワード分析 第2回 3章1-6節 原典講読 文脈、構成、背景 第3回 3章1-6節 節ごとの注解および解説 第4回 3章7-19節 原典講読 本文批評、試訳、文法的分析、キーワード分析 第5回 3章7-19節 原典講読 文脈、構成、背景 第6回 3章7-19節 節ごとの注解および解説 第7回 4章1-11節 原典講読 本文批評、試訳、文法的分析、キーワード分析 第8回 4章1-11節 原典講読 文脈、構成、背景 第9回 4章1-11節 節ごとの注解および解説 第10回 4章12-13節 原典講読 本文批評、試訳、文法分析、キーワード分析、文脈、構成、背景 第11回 4章12-13節 節ごとの注解および解説 第12回 4章14-16節 原典講読 本文批評、試訳、文法的分析、キーワード分析 第13回 4章14-16節 原典講読 文脈、構成、背景 第14回 4章14-16節 節ごとの注解および解説 第15回 まとめ</p> | | |
| <p><準備学習等の指示> ギリシャ語原典をしっかりと読んでくることにとどまらず、該当テキストに関する専門的な注解書の議論にもふれて、クラスに出席する。</p> | | |
| <p><テキスト> ギリシャ語新約聖書</p> | | |
| <p><参考書・参考資料等> 専門的な（ギリシャ語を前提とした）注解書をクラスで指示する。</p> | | |
| <p><学生に対する評価（方法・基準）> クラスへの積極的参加（出席、分担発表、質問、コメントなど）を求める。参加、分担参加（40%）、および（6,000 - 8,000字の）期末レポート（60%）によって総合的に評価する。出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。</p> | | |

| | | |
|---|-----------------------------------|--------|
| 聖書神学専攻 | | |
| 博士論文指導演習聖書神学 a | 各指導教授 | <担当形態> |
| 前期・0単位 | <登録条件> 博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。 | |
| <授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。 | | |
| <到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。 | | |
| <授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。 | | |
| <履修条件> 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。 | | |
| <授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。 | | |
| <準備学習等の指示> | | |
| <テキスト> | | |
| <参考書・参考資料等> | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）> | | |

| | | |
|---|-----------------------------------|--------|
| 聖書神学専攻 | | |
| 博士論文指導演習聖書神学 b | 各指導教授 | <担当形態> |
| 後期・0単位 | <登録条件> 博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。 | |
| <授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。 | | |
| <到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。 | | |
| <授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。 | | |
| <履修条件> 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。 | | |
| <授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。 | | |
| <準備学習等の指示> | | |
| <テキスト> | | |
| <参考書・参考資料等> | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）> | | |

| | | |
|--|----------------|--------------|
| 組織神学専攻・組織神学関係 | | |
| 教義学特殊研究 a | 須田 拓 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件> 学期毎の登録可 | |
| <p><授業のテーマ> 17世紀イングランドのピューリタン神学について、その論点と教義学的特徴とを探究し、その現代的意義を考える。</p> | | |
| <p><到達目標> 自由教会の起源と言ってもよいイングランド・ピューリタンの神学の概略を知り、日本の教会の伝統について考えつつ、自らの研究テーマについて、その伝統の果たしうる意義を深く考えることができるようになる。</p> | | |
| <p><授業の概要> 17世紀イングランドのピューリタン神学について、組織神学の観点から、講義と、博士後期課程の履修者による発表及び意見表明を交えて進めてゆく。いくつかのトピックを取り上げた上で、現代神学と比較し、現代神学に対する意義について考える。</p> | | |
| <p><履修条件> 特になし</p> | | |
| <p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 17世紀イングランドの教会と神学 第3回 救済論(1) アルミニウス主義と無律法主義 第4回 救済論(2) リチャード・バクスター（長老派）の場合 第5回 救済論(3) ジョン・オーウェン（会衆派）の場合 第6回 救済論(4) その他の神学者の場合 第7回 履修者による発表 第8回 三位一体論と聖霊論(1) ソツィーニ主義の主張 第9回 三位一体論と聖霊論(2) ジョン・オーウェンの場合 第10回 三位一体論と聖霊論(3) トマス・グッドウィン（会衆派）の場合 第11回 三位一体論と聖霊論(4) 急進的諸派の場合 第12回 教会論(1) 国教会体制の神学 第13回 教会論(2) ウェストミンスター会議の神学 第14回 教会論(3) 自由教会の神学 第15回 履修者による発表とまとめ</p> | | |
| <p><準備学習等の指示> 毎回、授業で扱う項目について、宗教改革者や現代の神学者の理解を調べておき、講義の最後に、ピューリタンと比較して、意見を述べられるようにしておく。</p> | | |
| <p><テキスト> 特になし</p> | | |
| <p><参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。</p> | | |
| <p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と意見表明、期末のレポート（6,000字程度）によって評価する。</p> | | |

| | | |
|---|----------------|--------------|
| 組織神学専攻・組織神学関係 | | |
| 教義学特殊研究 b | 須田 拓 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件> 学期毎の登録可 | |
| <p><授業のテーマ> 救済論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。</p> | | |
| <p><到達目標> 救済論の重要なテーマについて、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。</p> | | |
| <p><授業の概要> 救済論、特に再生・聖化論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき救済論の姿を模索する。</p> | | |
| <p><履修条件> 特になし</p> | | |
| <p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 救済論の論点(1) 救済の根拠と内容</p> <p>第3回 救済論の論点(2) 救済の秩序と現実性</p> <p>第4回 救済の根拠と内容(1) カール・バルトの場合</p> <p>第5回 救済の根拠と内容(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合</p> <p>第6回 救済の根拠と内容(3) ユルゲン・モルトマン、ミヒャエル・ヴェルカーの場合</p> <p>第7回 救済の根拠と内容(4) ロバート・ジェンソンらの場合</p> <p>第8回 履修者による発表</p> <p>第9回 義認と再生・聖化(1) カール・バルトの場合</p> <p>第10回 義認と再生・聖化(2) ヴォルフハルト・パネンベルク、ユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第11回 救済の現実性(1) カール・バルトの場合</p> <p>第12回 救済の現実性(2) ヴォルフハルト・パネンベルク、ユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第13回 救済の現実性(3) ミヒャエル・ヴェルカー、ロバート・ジェンソンの場合</p> <p>第14回 救済の現実性(4) 近年の議論</p> <p>第15回 履修者による発表とまとめ</p> | | |
| <p><準備学習等の指示> 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。</p> | | |
| <p><テキスト> 特になし</p> | | |
| <p><参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。</p> | | |
| <p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と意見表明、期末のレポート(6,000字程度)によって評価する。</p> | | |

| | | |
|--|---|--------------|
| 組織神学専攻・組織神学関係 | | |
| キリスト教倫理学特殊研究 a キリスト教社会倫理特殊研究 a | 神代 真砂実 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件> 組織神学特殊研究 b / 現代哲学特殊研究 b (後期) との通年の履修が望ましい。 | |
| <授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』中の倫理学についての部分を学ぶことで、バルトの倫理思想について深い理解を得、自分なりの評価を下せるようにする。 | | |
| <到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、倫理学の特定の主題についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。 | | |
| <授業の概要> バルトの『教会教義学』から創造論中の倫理学、特に 56 節 (「限界の中での自由」) に展開される生命および生活にかかわる議論を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。 | | |
| <履修条件> 前期課程との合同 (並行) 授業のため、後期課程の履修者は前期課程の学生よりも常に少なくとも一歩から二歩先んじた準備が期待されている。また、議論をリードする役割も求められる。 | | |
| <授業計画> 第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 テキスト、3～18 頁 (56 節 1. 一度だけの機会①) 第 3 回 同、18～41 頁 (同②) 第 4 回 同、41～64 頁 (同③) 第 5 回 同、65～89 頁 (2. 召命①) 第 6 回 同、89～112 頁 (同②) 第 7 回 同、112～123 頁 (同③) 第 8 回 同、123～137 頁 (同④) 第 9 回 同、137～156 頁 (同⑤) 第 10 回 同、157～172 頁 (同⑥) 第 11 回 同、173～187 頁 (3. 栄誉①) 第 12 回 同、187～204 頁 (同②) 第 13 回 同、204～217 頁 (同③) 第 14 回 同、217～236 頁 (同④) 第 15 回 同、236～252 頁 (同⑤) | | |
| <準備学習等の指示> 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席することはもちろんであるが、さらに、テキストの内容に関連する事柄について自分から積極的にリサーチし、考察し、問題点を整理しておくこと。 | | |
| <テキスト> カール・バルト、『教会教義学・創造論IV / 4 創造者なる神の戒め (iv)』、吉永正義訳 (新教出版社、オンデマンド) | | |
| <参考書・参考資料等> 授業の中で適宜、紹介するが、Geoffrey W. Bromiley, <i>An Introduction to the Theology of Karl Barth</i> 中の当該箇所についての記述には必ず目を通して置くこと。 | | |
| <学生に対する評価 (方法・基準)> 授業への参加度 (議論におけるリーダーシップを含む)、小課題、および期末のレポート (本文 6,000 字以上) による。 | | |

| | | |
|---|--|--------------|
| 組織神学専攻・組織神学関係 | | |
| 組織神学特殊研究 b 現代哲学特殊研究 b | 神代 真砂実 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件> キリスト教倫理学特殊研究 a / キリスト教社会倫理特殊研究 a (前期) との通年の履修が望ましい。 | |
| <授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』中の和解論から概説にあたる部分を学ぶことで、バルトの神学思想について深い理解を得、自分なりの評価を下せるようにする。 | | |
| <到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、和解論の課題についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。 | | |
| <授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論の冒頭部分、57 節「和解者なる神の業」および 58 節「和解についての教説（概説）」に展開される議論を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。 | | |
| <履修条件> 前期課程との合同（並行）授業のため、後期課程の履修者は前期課程の学生よりも常に少なくとも一歩から二歩先んじた準備が期待されている。また、議論をリードする役割も求められる。 | | |
| <授業計画> 第1回 オリエンテーション、およびテキスト、3～19 頁（57 節 1. 神われらと共に①） 第2回 テキスト、19～37 頁（同②） 第3回 同、38～59 頁（2. 和解の前提としての契約①） 第4回 同、59～78 頁（同②） 第5回 同、78～95 頁（同③） 第6回 同、95～112 頁（同④） 第7回 同、113～132 頁（3. 破られた契約の成就） 第8回 同、133～157 頁（58 節 1. イエス・キリストにおける神の恵み） 第9回 同、157～170 頁（2. イエス・キリストにおける人間の存在①） 第10回 同、170～188 頁（同②） 第11回 同、189～210 頁（同③） 第12回 同、211～222 頁（3. 仲保者イエス・キリスト） 第13回 同、223～241 頁（4. 和解論の三形態①） 第14回 同、241～251 頁（同②） 第15回 同、251～267 頁（同③） | | |
| <準備学習等の指示> 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席することはもちろんであるが、さらに、テキストの内容に関連する事柄について自分から積極的にリサーチし、考察し、問題点を整理しておくこと。 | | |
| <テキスト> カール・バルト、『教会教義学・和解論 I / 1 和解論の対象と問題』、井上良雄訳（新教出版社、オンデマンド）。 | | |
| <参考書・参考資料等> 授業の中で適宜、紹介するが、Geoffrey W. Bromiley, <i>An Introduction to the Theology of Karl Barth</i> 中の当該箇所についての記述には必ず目を通して置くこと。 | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度（議論におけるリーダーシップを含む）、小課題、および期末のレポート（本文 6,000 字以上）による。 | | |

| | | |
|---|----------------------------|--------------|
| 組織神学専攻・組織神学関係 | | |
| 現代神学特殊研究 a | 芳賀 力 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件> 通年 (a, b) の履修が望ましい。 | |
| <授業のテーマ> 終末論的希望について博士論文執筆に資する仕方で、聖書学的、組織神学的に考察する。 | | |
| <到達目標> キリスト教信仰にとって、神の国、永遠の命、死後の生、復活について正しく理解する。修士課程を修了していることを前提に、現代神学における終末論をめぐる議論に広く取り組む。 | | |
| <授業の概要> N. T. ライト『驚くべき希望』を共に読みながら、現代人にとっての希望の可能性を熟考する。 | | |
| <履修条件> 修士課程を修了していること。 | | |
| <授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 N. T. ライト『驚くべき希望』を読む。希望についての混乱 (第1章) 第3回 鍵となる問い (第2章) 第4回 初期キリスト者の希望 (第3章) 第5回 イースターのストーリー (第4章) 第6回 宇宙の将来 (第5章) 第7回 新しい天と地 (第6章) 第8回 イエスの昇天と再臨 (第7章) 第9回 イエスの現臨 (第8章) 第10回 再臨と裁き (第9章) 第11回 体の贖い (第10章) 第12回 天国、煉獄、地獄 第13回 神の王国 第14回 正義、美、伝道 第15回 総括 | | |
| <準備学習等の指示> 参考に掲げたモルトマンの所説とたえず対論しつつ、テキストに取り組む。 | | |
| <テキスト> N. T. ライト『驚くべき希望』中村佐知訳、あめんどろ、2018年 | | |
| <参考書・参考資料等> J. モルトマン『神の到来』新教出版社、1996年 | | |
| <学生に対する評価 (方法・基準)> 自分の博士論文のテーマと関わらせ、主題を掘り下げて展開する仕方で、レポートを提出する。 | | |

| | | |
|---|----------------------------|--------------|
| 組織神学専攻・組織神学関係 | | |
| 現代神学特殊研究 b | 芳賀 力 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件> 通年 (a, b) の履修が望ましい。 | |
| <授業のテーマ> 終末論的希望について博士論文執筆に資する仕方、聖書学的、組織神学的に考察する。 | | |
| <到達目標> 悪が存在にもかかわらず、希望するキリスト教信仰の根拠について理解する。永遠の命について正しく理解する。修士課程を修了していることを前提に、現代神学における神義論と終末論をめぐる議論に取り組む。 | | |
| <授業の概要> N. T. ライト『悪と神の正義』を読み、悪と希望の関係について考える。その後、A. E. マクグラス『キリスト教の天国』を取り上げて、前期以来のテーマである終末論的希望の研究を総括する。 | | |
| <履修条件> 修士課程を修了していること。 | | |
| <授業計画> 第1回 前期に続き N. T. ライト『驚くべき希望』の最後を読む。教会と宣教 (第 14 章) 第2回 復活と宣教 (第 15 章 a) 第3回 復活と宣教 (第 15 章 b) 第4回 N. T. ライト『悪と神の正義』を読む。悪の新しい問題 (第 1 章) 第5回 正義の神 (第 2 章) 第6回 十字架につけられた神 (第 3 章) 第7回 約束する神 (第 4 章) 第8回 悪より救い出したまえ (第 5 章) 第9回 A. E. マクグラス『キリスト教の天国』を読む。新しいエルサレム (第 1 章) 第10回 楽園 (第 2 章) 第11回 贖罪 (第 3 章) 第12回 超越のしるし (第 4 章) 第13回 天国の慰め (第 5 章) 第14回 旅路の終わり (第 6 章) 第15回 総括 | | |
| <準備学習等の指示> 参考に掲げたモルトマンの所説とたえず対論しつつ、テキストに取り組む。 | | |
| <テキスト> N. T. ライト『悪と神の正義』本多峰子訳、教文館、2018 年 ならびに A. E. マクグラス『キリスト教の天国』本多峰子訳、キリスト新聞社、2006 年 | | |
| <参考書・参考資料等> J. モルトマン『神の到来』新教出版社、1996 年 | | |
| <学生に対する評価 (方法・基準)> 自分の博士論文のテーマと関わらせ、主題を掘り下げて展開する仕方、レポートを提出する。 | | |

| | | |
|---|------------------------|--------------|
| 組織神学専攻・歴史神学関係 | | |
| 神学史特殊研究 a | 棚村 重行 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件> 通年で履修することが望ましい。 | |
| <授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」。前期では、17～19世紀半ばまでの英米日の福音主義神学思想の第一次史料を読み、履修生各自が自らの第二次史料（論文）を作成する過程も学ぶ。 | | |
| <到達目標> 履修者が、英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学にかんする第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深めることを目指す。以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。 | | |
| <授業の概要> 前期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を提起し、17～19世紀前半（1650-1860）までの英米のピューリタニズム移植、第一次、第二次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について、講義と史料分析を行う。 | | |
| <履修条件> 現代・近代プロテスタント神学思想の基本的な知識、あるいは英米教会史・神学思想史などへのある程度の関心と素養が必要である。前期課程との並行事業でもあるので、後期課程の履修者は、十分発表前の準備をし、参加者の議論を補足し、リードする予習準備をすることが望ましい。 | | |
| <授業計画> 第1回：コース紹介。導入講義：日本の「福音主義」「福音主義の歴史」研究の批評（佐藤敏、古屋、青木他） 第2回：講義（一）：アメリカ教会史と神学思想史論の吟味：F. ボンヘッフアー、W. G. マックラクリン他。 第3回：史料分析（一）：17～18世紀「ピューリタン大覚醒」（T. フッカー）と英国メソジズム（ウェスレー）。 第4回：講義（二）：18世紀北米における「第一次大覚醒運動」（1730～1760）植民地時代の三大教派の出現。 第5回：史料分析（二）：J. エドワーズ（1）：「[ニューイングランド信仰復興の忠実な報告]」他。 第6回：史料分析（三）：J. エドワーズ（2）：「信仰復興についての幾つかの考察」他。 第7回：講義（三）：18世紀北米のメソジズム神学、信仰復興、教会形成：「宗教箇条」、A. クラーク等。 第8回：講義（四）：19世紀前半の「第二次大覚醒運動」（1800～1830）開拓時代の三大教派成長。 第9回：史料分析（四）：19世紀前半の新派カルヴァン主義神学の誕生：N. W. テイラー、L. ビーチャー等。 第10回：史料分析（五）：C. G. フィニー（1）：回心についての説教、「組織神学」から。 第11回：史料分析（六）：C. G. フィニー（2）：「宗教の復興とは何か？」 第12回：史料分析（七）：長老派内の新派カルヴァン主義：A. パーンズ 「救いの道」 第13回：史料分析（五）：メソジストの神学、信仰復興、教会形成：P. カートライト、D. D. ウィードン。 第14回：講義（五）：幕末開国期日本：改革派-長老派-会衆派型およびメソジスト型「二つの福音」問題 第15回：講義（六）：若き植村正久、本多庸一：福音主義神学、信仰復興、教会形成。FD実施。 | | |
| <準備学習等の指示> テキストの予習と復習が大切である。とくに予習に力を入れ、授業中の議論を準備すること。二次史料の予習を通して、授業中の議論を準備すること。更に授業に参加し、自らの研究のテーマを見出し、研究論文を作成する技術を見出すこと。 | | |
| <テキスト> ①W. G. McLoughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布) ②D. A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005. (部分的にコピー資料として配布) | | |
| <参考書・参考資料等> 授業中に追って紹介する。特に、S. E. Ahlstrom, <i>Theology in America</i> の必要資料はコピーして配布する。 | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）> 前期で扱ったテーマの一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成し、提出する。分量は400字詰め原稿用紙に換算して25-30枚以内。 | | |

| | | |
|---|------------------------|--------------|
| 組織神学専攻・歴史神学関係 | | |
| 神学史特殊研究 b | 棚村 重行 | <担当形態> 単独 |
| 後期・2単位 | <登録条件> 通年で履修することが望ましい。 | |
| <授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」。後期では、19世紀半ばから20世紀末までの英米日福音主義の神学思想の第一次史料を読み、履修生各自が自らの第二次史料(論文)を作成する過程も学ぶ。 | | |
| <到達目標> 英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学の第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深める以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。 | | |
| <授業の概要> 後期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を確立し、19世紀後半～20世紀後半(1865-2010)までの米日の第三次、第四次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について講義と史料分析を行う。 | | |
| <履修条件> 前期に同じ。 | | |
| <授業計画> 第1回: コースの紹介。講義(一)「マックラクリンの北米大覚醒運動史」のおさらい 第2回: 講義(二): 19世紀後半の北米神学の諸相: 南北戦争以後の北米の社会と宗教の変貌 (T.L. スミス) 第3回: 史料分析(一): 19世紀後半の「第三次大覚醒運動」(1870～1920)「都市の信仰復興」について 第4回: 史料分析(二): D.L. ムーディー(1): ムーディーの諸説教にみる福音主義神学と教会 第5回: 史料分析(三): D.L. ムーディー(2): 彼の信仰復興論「教会に行かぬ人に福音をどう届けるか?」 第6回: 講義(三): 20世紀初頭の日本の「大挙伝道」および「神の国」運動: 本多庸一、植村正久、賀川豊彦 第7回: 史料分析(四): 20世紀前半の第一次世界大戦後の北米の「近代主義」対「根本主義」論争、新正統主義主義神学について (H. R. ニーバーと熊野義孝) 第8回: 講義(四): A. J. シンプソン: 『四重の福音』; A. J. ゴードン 『み霊の務め』 第9回: 史料分析(五): 日本における神学の変貌: 中田重治のホーリネス神学と逢坂元吉郎の高教会神学 第10回: 講義(五): 20世紀後半の「第四次大覚醒〔戦後信仰復興〕運動」(1950～1990?) 第11回: 史料分析(六): ビリー・グラハム(1): 略歴と神学諸テーマ(啓示、創造と墮罪、贖罪) 第12回: 史料分析(七): ビリー・グラハム(2): 諸テーマ(救済、教会、説教と聖礼典、終末論) 第13回: 講義(六): 第二次世界大戦後日本における「戦後信仰復興運動」の神学、信仰復興、教会形成。 第14回: 講義(七): 1980年代後の英米日の福音主義諸派の動向: 北米の「宗教的右派」、「福音派」の動向。 第15回: 総合討論: 通年の学びからみた「福音主義」とその歴史の総括。FD実施。 | | |
| <準備学習等の指示> 前期に同じ。 | | |
| <テキスト> ①W. G. McLoughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布) ② D. A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005. (部分的にコピー資料として配布) | | |
| <参考書・参考資料等> 授業の中で、教員が追って指示する。Ahlstrom, <i>Theology in America</i> の資料コピーを配布する。 | | |
| <学生に対する評価(方法・基準)> 後期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成せよ。分量は400字詰め原稿用紙に換算して25-30枚以内。 | | |

| | | |
|--|--------|--------------|
| 組織神学専攻・実践神学関係 | | |
| キリスト教教育特殊研究 a | 朴 憲郁 | <担当形態> 単独 |
| 前期・2単位 | <登録条件> | |
| <授業のテーマ> ヨーロッパにおける宗教教育 | | |
| <到達目標> 今やキリスト教的伝統の自明性が崩れゆくヨーロッパ世界では、キリスト教の世俗化と他宗教信仰の移民の流入などで、宗教が流動化し多元化する社会を現出させている。しかし、将来の共同社会の形成に不可欠なく人間の尊厳、自由、民主主義、平和>を子供たちの間で培う際に重要な役割を担う宗教教育が、正教分離原則の諸国でどのように実施されているのかを把握したい。 | | |
| <授業の概要> 最初に、近年の欧米諸国の宗教事情を全体的に把握する。その上で、いわゆる先進諸国における宗教教育がどのようになされているか、また何を目指すのかを、諸資料を用いた共同作業（発表を含む）によって把握していく。 | | |
| <履修条件> 特にないが、授業の後半で文献を読み合わせ、必要に応じて発表していただく。 | | |
| <授業計画> 第1回 ヨーロッパの宗教教育を巡って（序論） 第2回 欧米諸国の宗教事情－カナダ－ 第3回 欧米諸国の宗教事情－ロシア－ 第4回 欧米諸国の宗教事情－スペイン－ 第5回 欧米諸国の宗教事情－スウェーデン－ 第6回 欧米諸国の宗教事情－イギリス－ 第7回 欧米諸国の宗教事情－ドイツ－ 第8回 欧米諸国の宗教事情－フランス－ 第9回 欧米諸国の宗教事情－イタリア－ 第10回 欧米諸国の宗教事情－アメリカ－ 第11回 ヨーロッパにおける宗教と教育－スイス－ 第12回 ヨーロッパにおける宗教と教育－イギリス－ 第13回 ヨーロッパにおける宗教と教育－ドイツ－ 第14回 ヨーロッパにおける宗教と教育－オランダ－ 第15回 ヨーロッパにおける宗教と教育－フィンランド－ 宗教教育学的総括 | | |
| <準備学習等の指示> 次週の授業範囲の関連資料を、各自前もって読んでおくこと。随時、担当箇所を発表していただく。 | | |
| <テキスト> 1. 文化庁、『海外の宗教事情に関する調査報告書』、平成20年版／平成24年版、 2. Peter Schreiner (ed.), "Religious Education in Europe, Comenius Institute, Münster 2000. 上の二つのテキストは担当教師が用意する。 | | |
| <参考書> 1. 善家幸敏、『国家と宗教』－政教関係を中心として－、成文堂、平成5年(1993年) 2. Peter Schreiner, „Religious Education in the European Context”, Hungarian Educational Research Journal; One Blog by Peter Schreiner, Religion and Education in Europa, 2013~2014. | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、討論への参加度によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。 | | |

| | | |
|---|-----------------------------------|--------|
| 組織神学専攻 | | |
| 博士論文指導演習組織神学 a | 各指導教授 | <担当形態> |
| 前期・0単位 | <登録条件> 博士論文指導演習組織神学 b と通年で登録すること。 | |
| <授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、博士論文のテーマを設定し、研究を深め、論文を執筆する。 | | |
| <到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。 | | |
| <授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、実際に博士論文の作成にあたる。 | | |
| <履修条件> 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。 | | |
| <授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。 | | |
| <準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドバイスを受けるようにする。 | | |
| <テキスト> | | |
| <参考書・参考資料等> | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）> | | |

| | | |
|--|-----------------------------------|--------|
| 組織神学専攻 | | |
| 博士論文指導演習組織神学 b | 各指導教授 | <担当形態> |
| 後期・0単位 | <登録条件> 博士論文指導演習組織神学 a と通年で登録すること。 | |
| <授業のテーマ> 設定したテーマのもとで、さらに研究を深め、論文を執筆する。 | | |
| <到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。 | | |
| <授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。 | | |
| <履修条件> 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。 | | |
| <授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。 | | |
| <準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドバイスを受けるようにする。 | | |
| <テキスト> | | |
| <参考書・参考資料等> | | |
| <学生に対する評価（方法・基準）> | | |